

## 第5回

# 秀麗富嶽十二景写真コンテスト

## 入選作品

最優秀賞

ナナカマド冴えて

小林 博（山梨県大月市）

白谷ノ丸



白簾史朗氏講評

3番山頂の大蔵高丸・ハマイバの範囲となる白谷ノ丸からの秋富士。作者は昨年白谷ノ丸からの作品で入賞されているが、今回の作品はまさに抜群の出来栄で最優秀賞の名に恥じない。中景の山腹に配したナナカマドの実とハンノキの黄葉は、新雪あざやかな富士山とみごとな逆いの字構図を形成してすきがない。色調、配色、全体の調子が好条件とあいまっての秀作であるが、その底には作者の不断の精神が如実にうかがえる。

推薦

朝光に輝く 佐野 弘子（静岡県富士宮市） 姥子山



白簾史朗氏講評

2番山頂・雁ヶ腹摺山中の姥子山からの作品。題名にふさわしく、カラマツの黄葉が絶好の角度であたる光で金色にかがやき、そのはるかかなたに山頂にちょっと雪を置いた富士山を配した。あまりにも透明な大気のために山麓まで明瞭に描写されたこと、右手に三ツ峠山の構造物のあるのが惜しいが、全体の価値を損なうほどのものではない。さわやかさが売りものの秀作。

推薦

月明 奈木 正次（静岡県沼津市） 高川山



白簾史朗氏講評

1 1 番山頂・高川山からの夜景である。夜景、それも富士山の夜景となるとたいていの作品が露出オーバーとなるが、この作品は実に適確な露光をあたえている。富士山の山頂付近にからまる雲と富士吉田市街に漂う淡霧が月明に映えて構図を明確にしている。やや左方を切りつめての作画が全体のバランスをととのえることになる。

特選

朝陽に染まる 谷地 光明（千葉県市原市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

3番山頂・大蔵高丸からのもので、朝陽に色づく草原と樹林を富士山に組合わせている。なかなかのテクニシャンといえ、この作品の良さは手前の草原のそよぎにある。晩秋の風にざわめく山頂の草原がスローシャッターによって適度な動きを見せているところがいい。したがって題名はふさわしくない。また、PLフィルターを使用しているにもかかわらず、少し露光が多目となっていることも題名にそぐわない色調となったのは惜しい。

特選

ツツジ咲く 遠藤 潤（山梨県東八代郡） ハマイバ



白簾史朗氏講評

花と富士、これほど華やかな組み合わせはあまりない。だがそれも富士山に雪の白さがないと折角の花も引き立たない。ここではハマイバ（丸は不要）に咲くツツジはまだ五分咲きだったが、それがかえって花色をあざやかにさせ、富士山と対照的配色としたことが生きた。もう少し富士山が右方であればより安定した構図となったろう。

特選

ツツジの咲く頃

梶原 正剛（山梨県南都留郡）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

1 番山頂・雁ヶ腹摺山の山腹に咲くトウゴクミツバツツジを前景としての富士山は、この山の定番展望ともいえるものだ。テーマと副材が画面の縦中心線にまとまりすぎているのが少し気になるが、まず特選として申し分ない出来である。欲をいえばツツジにもっと光がまわり、右方の林道が見えなければよりすっきりしたものとなる。ありきたりの構成から一歩抜け出すことが今後の課題となろう。

入賞

名峰白雲たなびく

斉藤 年丈（神奈川県横浜市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

いくら好アングル、好展望台だといっても、条件がともなわなければどうにもならない。さらにはその条件を生かす技倆が必要とされる。この1番山頂からの作品はそうした例の典型的なもので、富士が焼けなければどうにもならず、それも雪が必要である。しかし、通常は下方が単調となりがちな画面を中間の雲でしっかり支えている。万全とはいえないまでも富士の気品を表現した好作品といえる。



入賞  
秀峰

佐野 文隆（静岡県富士宮市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

2番山頂・牛奥ノ雁ヶ腹摺山頂はなかなか撮りにくいポイントである。アプローチも12山頂中もっとも不便で、そのためこの山と取り組む人がすくない。だが、条件に恵まれ、撮り方によって、このようなすぐれた作品も生まれてくる。題名どおり、いかにも秀峰を画に描いたような富士山である。富士山の雪に対して、やや露光オーバーなのと、山頂が上下中心線に位置しすぎていることが残念。

入賞

新雪の世界

天野 昭吾（山梨県大月市）

白谷ノ丸



白簾史朗氏講評

願っても得られない好条件下の富士山。これも不断の精神と地元の利が生きた作品であろう。降雪直後のこのような写真は、それが的にあたると効果が倍数的に増加する。光が生きていることがひとつ、前景の入れこみがよい、このことが入賞の因となるが、富士山が右に傾いてしまったこと、ピントが全体に甘いことが惜しい。

入賞

笹子谷紅葉

丸山 敏章（山梨県山梨市）

滝子山



白簾史朗氏講評

朝の光に映える紅葉の山腹が実に生きている。反面对岸の鶴ヶ鳥屋と笹子川の谷はかげっっていて、ちょっと題名がそぐわない。「紅葉に遠く」とでもした方が、折角広角レンズを使用した構図にフィットするのではないかと思う。だが、なかなか考えた撮影ということが全体からうかがえ、作者のオリジナリティが伝わってくる。この感じをもっと押し進めて行ってほしい。

入賞

淡紅の朝 奈木 正次（静岡県沼津市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

ただひとり、12の山頂をすべてクリアした作家であり、応募した12点の作品はすべて水準以上のものであったが、原則を破っても1人2賞が限度なのは、この作者にとっては不運の極みである。奈良倉山からのこの朝の作品は実に端正な気品に満ちた傑作とあってよい高クォリティものである。本来なら最優秀賞の声がかかるところだが、すでに2年連続で最優秀賞を射止めているため、惜しくも今回は入賞にとどまった。3回目の最高賞をめざし、また来年も期待する。

入賞

紅色朝 加藤 泰郎（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

6番山頂。扇山はポイントが限られ、撮影に何となく制約がある。その扇山からの富士山を実にうまく捉え、たかだか1000メートルの山から望んだとは思えない高度感の表現に感服する。これは左右・上下の切り方によるもので、やはり足しげくかよって、すべてを知り尽くさなければ不可能であろう。ほんの若干、露光を切りつめてもよかった。

入賞

変幻する雲 北沢 清行（山梨県大月市） 百蔵山



白簾史朗氏講評

7番山頂・百蔵山は扇山と同様、アングルは通常、山頂のみに限定され、前景に市街地や宅地造成地が入り込んで、まとめに困難なところのある山である。といっても、このような条件のときもあるのだから閑却することはできない。この作品もあの低い山頂からとは到底思えない高度なものだが、やや時間的に遅いのが難点で、そのため少し青カブリがある。山頂が上下中心線に近すぎるので、上部を切って、下方をもっと入れこむことで画面がぐっと締まり、高度感がでる。

入賞

春の彩り 竹田 辰巳（山梨県大月市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

この華やかさはまさしく春の彩といえよう。岩殿山といえば4月上～中旬のサクラが有名だが、ここでは意表をついてヤエザクラとヤマツツジ咲く5月に的をしぼったことが成功している。下方にひろがる市街地をうまく切り、額縁的效果を狙っているが、春雪まばゆい富士山が、周囲を囲まれながらも自己を大きく主張している。テクニック賞ともいうべき作品。

入賞

夕照

井上 和夫（山梨県大月市）

高畑山



白簾史朗氏講評

氏は加藤泰郎・竹田辰巳両氏に次ぐ5個の山頂からの富士山を応募されたが、この高畑山の作品が選出された。夕焼け空をバックに静もる富士は静謐な中にも重厚さと華麗さを秘めて表現されている。他の作品が心なし露光過度で、富士山の雪の質感が損なわれていたのに対し、この作品はじっくりと撮り込んだという精神的なものが感じられる。高畑山の久々の快作である。



入賞

秋色づく 高津 秀俊（山梨県大月市） 高川山



白簾史朗氏講評

このところ人気11番山頂・高川山は、ハイキングでこそ賑わうが、カメラで富士山を狙う人は意外に少ない。人が多すぎると、カメラポジションが限定されるせいかも知れないが、この作品のように静かで誰もいない（と思う）日もある。ちょっぴり冠した新雪と透明な大気、雲一片ない悪条件？にもかかわらず、この山の雰囲気のみごとに表現している。

入賞

秋日和 松里 房子（東京都板橋区） 九鬼山



白簾史朗氏講評

秋日和というより「小春日和」という題にした方が良かったと思う。この作品を撮った日のように風もなく、うっすらともやの立つ日のことを古くからそう呼ぶ。山あいが逆光にかすみこんだ中に光るススキの穂を入れこんで、その動かないススキのかがやきに静かな陽光を表現した技術は卓抜である。出来得ればもっと左右と上下を切って、ススキと富士山のみで単純化したい。

入賞

夏富士 広瀬 雅英（山梨県富士吉田市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

この題名よりは「雲霧に明ける」とでもした方がよかった。夏の字が頭につくと、どうしても青空と入道雲、濃い緑が脳裏に浮かんでくる。しかし、左方に三ツ峠が高いこの12番山頂・本社ヶ丸で、よくこの作品を撮ったものだと感心する。雲の動き、かすむ山肌の上、色づいた朝空のもと、富士山がある。その富士山の位置が絶妙といえ、右下の樹が押さえとなっている。

## 総評

審査員長 白籟史朗

昨年から本年にかけては、ここ近年来取り沙汰されている地球温暖化・異常気象がさらに表面化したような現象が多々あった。永雨と早天が交互にやって来、冬に入ってもいっこうに寒気がおとずれず、と思うと一転して急激な気温低下を見たり、例年にない大雪が太平洋側地方を襲ったりした。そうした異常気象の影響で、このコンテストも年々締切り日を延ばすことになったが、この第5回は昨年よりさらに1ヶ月繰り下げられたため、第1回からみると、何と4ヶ月の繰り下げ締切りとなっている。

今回の第5回の応募作品レベルは、昨年よりまた一段アップしたかに思える。だが、応募者のほとんどが考えるように、締切り日繰り下げが撮影的条件に有利となり、そのためレベルアップしたとは、小生は思わない。

たとえば富士山の冠雪が遅いから、その冠雪富士を撮影するには時期があとの方がよい。だから締切りをなるべく遅くしてくれ、という応募者からの要望は、こうした毎年連続して催されるコンテストにおいてはまったく関係ない。なぜなら昨年度も書いたように、十二景への挑戦は一年を通じてのものであるからだ。

第5回コンテストの応募者数49名、応募総数195点は、全体的に見て応募者2名減、ただし応募者点数は逆に20点のプラスである。地域別に分けると大月市内17名、前回比プラス1名で、応募点数91点、前回比プラス24点とまずまずであった。山梨県内では14名でマイナス1名、38点でマイナス8点と低調で、県外は18名でマイナス2名、66点でプラス4点といった数字である。これを一昨年の第3回に比較してみると、市内9名減、作品18点増、県内マイナス6名、19点減となる。県外応募者はプラス5名の28点増である。市内では応募者が減って、応募点数が増え、県内はともに2年連続マイナスとなっている。市内および県内作家の奮起を期待したい。

山頂別に見ると、今回は欠落した山頂はなく、すべての山頂からの作品が集まった。ただ、まだまだ片寄りが多く、最多の応募は雁ヶ腹摺山の26名57点、昨年第1位の大蔵高丸・ハマイバは今回21名46点、3位は百蔵山の12名20点、次いで扇山11名16点、清八山・本社ヶ丸9名13点、岩殿山8名14点、奈良倉山7名9点、滝子山5名6点、高畑山4名5点、牛奥ノ雁が腹摺山4名4点、九鬼山3名3点、高川山2名2点という割合となっている。

各山頂によって異なる応募者数の数と作品数は一部の例外を除いて、必然的に作品の良否につながる。それぞれの山頂に多くの人を訪れ腕をきそうことが、このコンテストをさらに発展させるものであることを理解して取り組んで欲しい。どの山頂もアプローチは便利で体力的・アルバイト的にさほど差はないのだから、ぜひ全山頂からの作品をそろえて応募をお願いしたい。今回は全山頂応募はただの1名、10山頂が1名、6山頂が1名、5山頂が2名、4山頂が2名、3山頂が6名、あとはすべて1～2の山頂のみであった。かぎられた入賞者数であり、一人一賞が原則であっても、一人二賞もあり得ることは過去の例で明らかである。第6回はできるだけ多くの山頂からの作品を見せて欲しい。さらには応募点数も現在の12点をもう少し増やすことも考えている。

それと応募票の各項目は必ず正確に記入することも大切なことで、今後はそのことも入賞の基準となることを知って欲しい。